

中村俊定文庫
文庫 18
368



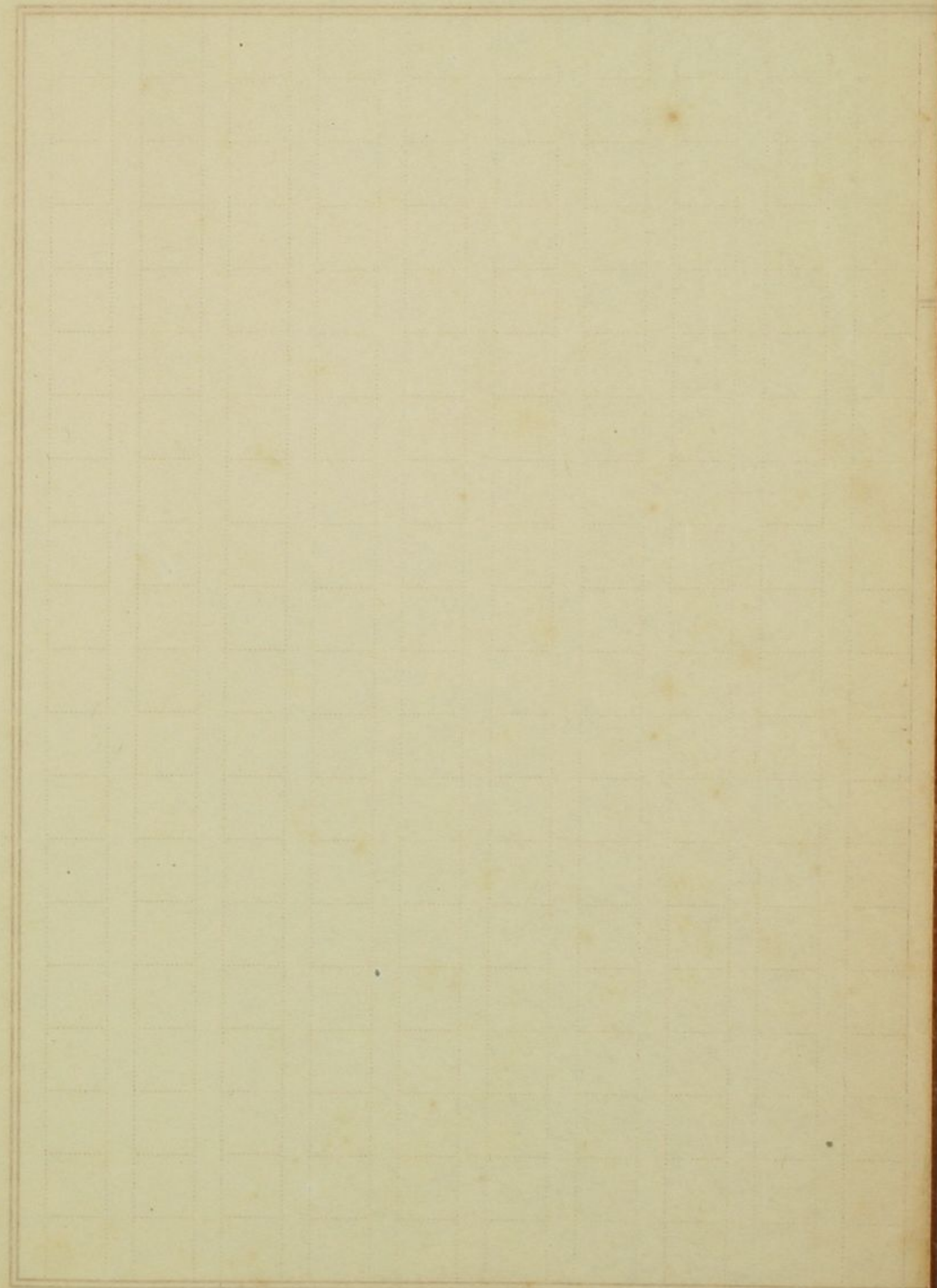
丁卯東稿心海選

丁卯東稿心海選

雨夜稿

自序

陸放翁が聴てはしめて奇なりとは
 つくといふ俳諧の意地にして夜の雨の管より
 くゝる粟は歌人の顔に冷ついてさそや淋しか
 らんとなり。比艸稿はそれらの糟粕を舗るに
 はあつてたゞ口まかせ筆まかせ雨夜にもあつ
 す島夜にもあつす。一寸さき





No. 2

一南北新詠 麦林乃説 麦林常に左右にしめす
 附ても悪き句は取へからす附ぬ句は猶取へ
 からす是れ水中に附句の論は七名もなく八
 名もなく只日用のまのあたりを機に轉し麦
 に化しあるへき事を趣向として一句に一ふ
 しの手つまを尽すすへて初心の学道にはか
 ならず附になつむへからす前句の作におと
 ろくへからすた、其物の、中、身を、見出しほと
 よき作をかいつまいて梅の花に寫を案する



1

は階なりけり

寶曆庚辰仲徳既望

近青菴北溟



白字



10
20
ノール

七名八舞の流
と無記す、不可
と、ほどよき
の法、不徹、不
作す

とも骨折をあらハす時は二句の間に意味と
生して新しき附とはなるそかし 下畧
附ても悪き句は取へからず附ぬ句は猶取
へからずとはいふに及はず悪き句を取
附ぬ句をとれとは師たる人誰か教ゆへき
そ七名もなく八舞もなしとはあかしの事
にして今の俳諧の論にはあらずそもく
詩といひ歌といひ詩は凡ソ周詩三百篇を
もて詩祖とし歌は八雲の神詠より起れり
といへと詩も予もその道を学ぶ法格は後

10
20
ノイブル

の人のさためて後の人の学ふたよりとせ
り。しからハ俳諧に七名八舞の教へあふし
て可ならんやその物の本祿を見出しほと
よき作をかいつまえてとハ俳諧に二十年
骨折たる人の上^{上手}の沙汰にして初心の学道には
あらずの附るも本祿を見出し程よく附
るより外なしすへて学道には下^下学上達の
次第ありてほとよきの字ハおもし知足と
も無量とも不偏不倚の詞にしてそこを世
法に和らげてほとよきとハいへり。扱白狂

先生、曰乙由は山田の産にして當時に俳
諧の名匠たりと、あはは麦林の説とな覺束
なし

一 全 惠の論 蕉門には惠の詞をもて惠とせ
す心の惠をむねとすといへり是はあは法師
のあひろめたるをかの法師の趣意もしうて
古法をやふり私のしやすきに居るもの多し。
もし傾城とも娘とも売ともいふを惠とせず
は何とてあもてにいふ事をやは一條をもて
もしるへきなり。

10
20
ノイブル

傾城に家とさすものは阿れと腎虚をした
る人をきかんとはよく傾城買の上を尽せ
りといふへし。えより遊女はう里もの存小
は裏は全盛につのるを第一として千金を
塊ツギの正しくし遊女はいつきけり、を専らとせは
金くる、男にもシこらえて存ひかす喜ぶ女
即ち嘘ハひききつ勝なり復か遊飲の頂上
存小は遊女とも遊所ともいへりさハいひ
五百年に一度も貪乏曾有る我曾家又海をつく
す遊女もあらんか、しかうハ、傾城とは

和合の道理より方三は三郎一にして四句
 目は地教は四をもて和合す五句六句目は
 地にして七句目は月の座なれは神祇以下
 名所人名は自門他門しよともいふに及びん
 す一てむヤキヤキ詞も表の内にはせぬやうにする
 が我家の法有りさうから身を賣ものとする
 悪所沙汰は悪有りぬ句も表にいむなり
 是を物の取あつかひの上手といふなり、さり
 ながら人は嫌へと我が嫌はぬといハ、そ
 れハ自暴自棄にして論及りん

加星いふるはあう星物の名目とあ存しく
 悪の詞とのみさためかたし
 ○ 駕籠工三星の飯忘いなるなり
 傾城の成りぬきしんくたなニ歩の布施しん
 ○ 氷巻もたは長ぬ細工すき
 小傳ほの用は娘の子にか、星
 ○ 月は是りんごたのが丸いのが
 菊萩す、又先かすかや
 是等の句は悪にあつれえあうに傾城虎の
 類を表にいむ事は表八句は余句脇は陰陽

10
20
ノイブル

難きものなりと雨降雪ふるといふもかたか
 うん句は物よよるとのかはいいつれがやすく
 かつれが難かうんた、上手と下手との論を
 るし中略
 案の朱を奪ひ利口の邦家を覆すといふも
 以事なり其の句もし難きものなりハ雨降
 雪ふると難かうんと一理あるやうに問か
 水と花に理の屈する所あり梨花先師の
 っれくの讚を足るし、の仙人のものの
 洗れ女の脛の白く、
 えて通をうしなひし

夏衣集此方三よ
 お迎のぬり梅一筋袴着て
 去年とはかかれ之服の顔
 以所表の内存、此は前句の實際は僞上者
 ぞ見て以句に
 あれ此帯の中は強ぬす
 少いをいふふよし
 世に其の句ほどあつたし、そのはなしとさ
 い小人を足るに外のこ、ろやすすと云句作
 におぬても打撃く手つてもなし其の句もし

人や外の色をいぬハさもあらんかしやい
 へる癖好か詞は賦意の足かたきより心の
 表の句の附かたき事はえだきうさはいひ
 句玉に難易はあかきと悪は人間情欲の牙一
 にして梨頬生^ス微^ツ渦^ツと爰したるを朱子の自
 警とし玉へるなりさるから難といふい恋
 の句はおほく有心祇の附あれは雨の雪の
 と日をおなしくして何え流らんさそ
 恋といふ玉ハ俳諧のそにかきうん和夢に
 も寄り所あり拾遺恋の五

ハかりの色をいぬ其のいろをいぬとす
 扱ハ皮毛を註して久米とのにむを附たり
 しかるに東花法師は癖好心膽を方鏡に
 照してその註にされは久米の仙人はよの
 つねの仇夫にもあふねハよふと合点の行
 たん^ンとあふふに腫の白才に通と失へる
 たと殊にあさはかなるを肥あふうつきた
 らんはむと例の字面にほめたり也前段男志
 かうはあもて菩薩シモカにほめたりとも内心夜
 又カハ借老のちき星を逐ツ同穴の土に朽

のいましめはなし 下略
 経又のこゝろをも の理屈はを言ふ所之
 たりさ小と有天地 然後 有萬物 有萬物 然後
 有男女 有男女 然後 有夫婦 夫婦 亦小は陰陽
 文合は人道の第なり 妻慕愛執の深さは人
 情の差有り その差にいたりては男女の差
 別なし 精衛公主の藉貫か閑雅俊逸の儀容
 に念と動して仙境にうき名をたて 菊姫は
 川邊左京に忍ひあふさしたむに決して 既
 に百年の命を誤るとせし たくひ大衆ハ

善祐悟師なかせられて侍ける
 ととき母のりひつかいしける
 なくふみたせはみふ海と有りなるん
 おなしなすさにあゆむよるへく
 季吟老人、曰母の心哀なり 此哥妻にあふぬ
 と子をおもふ 悲慕哀愁の儀を小川にやと
 誠に明眼の註者なくん、撰者の手かろ空
 しあふん
 女といひあすめといひ自然と藤懐のひきき
 あつて男の髪にてよめる 綱には大衆も繋る

りさるゝん 表の添にうき舟の曳るゝ 綱は
男にも新しあうといはんか 賢士あはは 烈女あ
り 淫婦あはは すき人あは 甘竹は 甘すに飽
跡トコロを は 甚すを 味ふ 世界の道理はもち
なす一し

一全 自然の句

菘笠を水田へもとすしくれ哉 晩九

麦林 称歎にあつかはし又 諸家の儀論を聞に

もし休見ともハ情ともあきた(うか)句にはあ

らし竹田もし菘笠の名所なづハ又句にあ

10
20
ノイブル

し只菘笠のもとす所に 理屈をはなれはのか
に菘笠の縁も動かししあも 淀井田の堤つた
ひにしく水の風景を尽せるとそ

續猿蓑集に

馬ゆりて井田の里や行しく純 乙卯

五もしを菘笠よ取かへて 詞はわい水と

淀井田の堤つとひに 時雨の風景を尽せ

趣向ハ此句前作有りしかるハ 自然の句と

ハ 濛ホウ扱アなる一し

一全 流行の岩論 岩末て問成ころ三、類合と

しく無用に無用を云ひさぬ 中略
 吾人の清淡い我々い休閑は無法とあつ
 かふものから無用に無用をいひかさねて
 は休閑にちいれ我家の教は左にあらず無
 用の用なり塩麩の歯くさにも臭の底の句評
 を足るし無用の用といふは奇りところ
 あり荘子曰知無用而始可與言用矣地非不
 廣且大也人之所用容足耳然則則足而墊之
 致黃泉人高有用乎婁子曰無用莊子曰然則
 無用之為用亦明矣

いふものを見るとかく流行してもてゆかハ
 小うた しす 淨瑠璃のさたにして終には川崎音既
 りきにもまうと花庭えが言故あうとあ
 もふこ、ろくに師の言を聞かす曰すてか
 くのとき討論ハ花の人にあらずんはし了一
 ありは息を踏しいるもの機関あり人を教る
 斗の警策あり庭えにいかなる趣ありと
 我をけかつて論すかうんされと戯に我心
 せいハ、庭えと及せる事鴉鷺のことしと
 より御借と云ふのはかの吾人の清淡にひと
 10
 20
 ノーブル

我'能'語は浄瑠璃作文伊勢音既といふより
 難波の浄瑠璃に作らるやといふ迄の文は
 三教合の柳不易流は能語の
 といふより終には川崎音既のうき名も
 主る舞かしといふ迄の文義をとくと看破
 せさるゆへ反せし事鴉鷺のこゝしを能
 語の流行トナリといふ事は四時^ノ運行する所と
 おやし花ちうて音楽と変り秋は實を正す
 ひ程なく人目も叶ふ枯はて水は又發生の
 氣に儼ふさ水て木の芽不^レく^レに人もあか

我'能'語は浄瑠璃作文以勢音既鴉 鶺鴒海流
 音既是はいかいのあをひにして天地と共に
 不益なれば不益は別流行にして中略
 されは流行い使かむとよりにして別に流行
 に論をか^レす^レす^レに惟然坊かむせ秋の句を
 作て鈴扣にタたひあ^レき梅路は諸家の句を
 音既にして都鄙の街にうたはしむ是^レ身^ノ
 うき名をや能語いしはうき^レあ^レていはす神
 孫雲上のよしあしを難波の浄瑠璃に作らす
 や下略

流行の姿

法松もなぐ舞遊所の人の時の氣に乗て
 いひはやらせはまのふ都の風謡ハヤウタもけふは
 吾妻の出来口にすたりてけふ又明のむ
 かし謡と成て日々月々に新奇をもとめ
 へくとのゝ行て跡へシヨもとる工夫をし
 すさるから俳諧もこのことく十年の峠に
 のほりてもとるといふ流行の理をし
 小は流行に行過て小謡浄瑠璃川崎音の
 こときりき名ととるへすといふ事あり。

10 20 ノーブル

了るへ出かこく行てはかへりかへりて
 は行かこときをいへりしわるに近年座
 か俳諧の流行におくれたわハ油のあま
 しといへる文通は是へくとはあり行を
 流行と覺えたる是之遠ひを三類合に辨し
 て其のふの不易を捨てけふの流行に遊人
 にはけふの流行はあままた古のうんそ
 らは小謡浄瑠璃の浄化にして終には川崎
 音のうき名にもまうふかしと書り小う
 た浄瑠璃の類はいにしへよりきたまれる

繩か来てあちう向たる柳哉
 爰か十年の峠にしてや場と行過水は諺と
 もけし物も存水は是より禁へか一り
 て
 鶯や筵の枯葉をふみ落し
 げ句と流行す水は
 鶯にほろりと筵の氷かふ
 一全 其角か馬尾琴の附のうすに 鹿をふる
 わする鳥帽子めりさぬといふ句は礼服の嚴
 重なるに取はつしのすかたいとあやしきふ

10
20
ノイブル

しにいひなせとも至て野鄙なる作といふ
 し
 世傳鳥羽僧正畫^テ縞紳^{ハヒリコウ}氣^キ競^{ケウ}之^ノ姿^サ達^{タク}上^{ジョウ}聞^{ケン}とあ
 水は^ヲ衣^イに^ニ鹿^カの^ノこなし何の野鄙なる事か
 あらんた、し狩衣ハ狩装束にして礼服と
 はいふへからす五老井^カ曰其角者蕉門之一
 人^ニ而^{シテ}後^ニ起^リ己^ノ一^ノ風^ヲ
 鬢のあす妻丈めつらし猫の恋
 美しき顔かく雛の跡爪かな
 親にうむ平^{ヒラ}目^メふみ行^{ユク}汐^シ干^{カン}哉

手を切ていよく憎し鮫のつら
 是等の手術に至ては世にいふ人も鮮し
 老敏捷の智にかけり作にたふるゝのうさ
 名は惜むへしその愚には及ふへあふん
 曰夫子の教誡今さらいとたうとし
 一芭蕉翁頌陀物語 支考非亮へ文通并乙由の

句評

ことしは山里に引籠ひこり獅子庵の月を
 て自問自答の二章を詠凡

甚問 草よりも親名立らん けふの月

10
20
ノイブル

其答 ちかつきの歌答うつる月足哉

乙ニ句中捨、取、乙由方分

やかて濡る山を晒すやけおの月

と中末のハハこれらの手つまは愚者も閉口

及、定まる金味の事うさる勢よく中末くま

と

進賢為賢愚老閉口の屈節は吐握の事にも

おとるへきか人のよき事を隠は小人の

こ、ろ有りて書面を足て蓮ニ先師の大

編はあうけたりて文通は享保年中にし

頭陀物法は人
 嘯を聞て虚実もた
 大川
 雲鈴
 野川
 魯九
 野
 花の雲足おろせぬ又よし
 野川
 魯九
 花鳥のよし野は五岳の句ひかふ
 雲鈴
 雲の五筆は雲鈴
 陀囊にあさめ
 我里の條
 といふ名に其
 一り今に家
 とせり
 旅亭にて簾紙を短冊形
 切て書水し
 師と雲鈴い
 一立歸り玉ひける
 とそよし野
 雜別
 のころ忠信もなし
 山津くし
 魯九
 よし野か
 別れ
 和歌吹上の浦へ趣き
 昔跡の

蓮二坊の時有り
 考考とほ時代遠ふたり
 志もなやこ、にもひより
 月の客
 去来
 山を晒すは上手の午つまに
 してこ、に
 ひよりとハ
 岩畔自然の風流詞巧
 いたる
 して名人の常有り
 一全
 支考童平をさしはさん
 てよしの山に登
 了
 支考支師のよし野行脚に童平を伴ひ玉ふと
 は虚説有り
 以時の行脚に紐する人は
 法、大川
 美濃、魯九
 越後、雲鈴
 同行四人有り
 大川魯九ハ

おのの按搦を附て書たるものと足之たり
 信用しかなき事多し又許六病床の事集に
 書へき河法もあはれその家は當時大家
 に奉任して歴々たり俳諧は世法なり時
 をはかるしし

淮南子に伯牛かるとはおもふへか
 一星月夜 又考曰古式のふ花論には花にいろ

く の品ありて或は植物に二句去三句去或
 は植物にあはれといひ或は雑といふ花もあ
 らと十色十に是かしく百世に諱はたふへ

10
20
ノイブル

かろ可繪に写し物に喩るも花は艶美の替
 名にして其木その中にあはれといふ花なし
 ○今辨曰繁持が我名をさへ是ぬは過去の業
 因なり己か是かたきとて古人の大法と破る
 道理あるへかろす佛道に八系四午の法あり
 儒家に儀禮三曲神三午あり是あたく
 たき品とを学ひつくしてこそ其造の名師と
 は称せうへりれ下略

古今あに古式のふ花論にまきらひしき所
 をあろため玉へは学ふに情ありて用事

やすししかるに其理も會得せりして佛道
にははあ回午の法佛家に儀禮三の曲禮三
午のこくとく是く多き之かたぐい暖しめたり
を法式とのえ心得て六字ふとすは芳しと功
なりといふなり

一 今 貞享之姓オモ與オモ蕉翁オモ而議カフ更ニ立テ祓テ詔ス新式シヨウシキ若干
條乃改テ字ヲ作リ祓ニ是一派之大意而鴻基所以開
於茲也 前後略

其角か自撰の集を足るに雜漢集も句足第
此言偏の誦の字なりしかるに改テ誦テ字ヲ作リ

とは古今あつた誦と誦に字論の微細な
る事とよくやみん風にあすけぬ大堰なり
芭蕉一流之大概と 是れはたたり蒼
父入は雜なりとの説は神祕の傳と足り小は
敬して評せん

一 俳諧古雅談 或問云凡に變化ありし
平給ふし答曰俳諧に變化を尚ふよし專に
いへり事心得たき事也變化は凡雅の悪處
にしてふしの力子なり子夏とやらんか毛詩
の大序といふ文にも王道衰一禮儀瘵小て衰

凡そ雅おこるとしるしぬれは世のすゑにな
 リての凡そ雅のくたう行にこそまといへる
 事なき、侍々たる篇はおいて論せ凡そ雅に
 も即盛晩の三の品ありて下略
 動天地感鬼神カクシキ莫ム近シ於詩侍の詩毛詩
 三篇篇にして詩は毛詩より起りしかる
 に盛晩の詩といへて詩の韵章句字去近ハ
 とつとして毛詩に似たる事有ししあがハ
 盛晩の詩は王造衰へ礼儀れて夏風雅お
 こるとして葉て用ひさるか詩歌俳諧は性

10
20
ノイブル

の感動を述べは時世を述ては凡調のさ
 かが変化すといふ表現をしるすして
 つれ月夜み未の飯と乳お心あはる佛の唯
 を背て即盛晩の海叙は例の存といふ一
 し
 一全 史記、滑稽に姚崇が俳諧也の註を以て我
 俳に令せ提したる誠に平花ゆか私言にして
 他のみする滑稽とやうにとる事やうに
 成めしむかなしん
 俳諧の證文に史記 滑稽を引奉は平花文

一全

師をけしめと是之たうか左には有る可清
 輔朝臣の眞義抄云漢書之俳諧者滑稽也下略
 傳云大史公曰天道恢々ウリ豈不大哉ウチ談言微中フカウチ
 亦可以解レ紛ヲ中略是等滑稽大意也下略眞義抄
 に滑稽の辨士を挙て引寄六首ある事をき
 かハ歌也他の國なる滑稽とやうレを學ぶ
 正のやうに成ぬるむかなしハ一しとて古
 雅淡の作者はさそや涙のかハく問ヒはあ
 まし
 支考文に堪能の名と得たト見龍の後

10
20
ノイブル

眞過こ凡解いやしうたりぬ
 人を誘ふと世の事を挙ていハするは訝し
 文章無過こソやしくは其いやしき文章を
 証據とすし我家の平氣文鑑和漢文操は
 假名文に法格を明し眞名文を新製して俳
 諧文章の龜鑑となれり五老井カ曰遊ニ東西南
 北ニ説ク凡雅ヲ而助シ諸生ヲ故ニ往々シ慕シ支考カ凡者多シ矣
 鄙鄙の俳人一たひ高標をあふけは世の習
 性ニ服して滑稽せさるもの存ししかるに
 減後十余年来は足師を誦諒するとの教多

あゝと死人に口をし替のいふ人
 たりされと替の膳人としく
 いふ我の終に
 と、まゝぬ世なめら
 儀論は千載の笑ひと
 もなすし
しせう

諸國疫句 附録

さしおては博めぬ栞の着役哉
 行儀の足弱つ小や十三夜
 秋のこぼし行三日月や神の爲主
 未了友の影もさしけり長待月

北方 五竹坊
 長良 冬白坊
 小幡 六芝
 大田 隆五

10
20
ノイブル

魚のなはい癖は之之すや山さくら
 待くこまたぬ壹やけと、すす
 立琴に響りか、りたり女郎死
 ちり時日山もいこかす栞のな
 交来ゆと裸にしたる委の木哉
 鐘ひとつ／＼に凋む木槿かな
 涼しさやちつとつ、行夜もすから
 時島はしめ終りの月のえら
 さひしさをと鳥中來りや厚の聲
 さゝたれや壁生柳もはへか、り

山白 杜若
 尾崎 五茶坊
 義仲寺 白庄
 栗津 雲裡
 神橋 文素
 力松 見風
 元吉 山
 大 睡
 柳 几

わた	腕	や	ぬ	か	こ	も	綿	の	お	ち	る	頃	東武
初	宮	や	何	に	之	に	く	い	物	も	な	し	初
桃	の	日	や	離	に	依	た	手	を	折	て	来	田
蘇	に	あ	る	も	の	よ	は	白	し	梅	の	花	北
昼	か	ほ	の	遠	て	め	く	る	や	ち	地	差	且
空	す	こ	い	姪	し	さ	る	な	り	蜂	の	聲	北
月	待	の	宵	や	門	田	と	刈	す	か	し		且
雨	脚	の	肥	た	音	す	る	は	せ	秋	乱		北
掃	こ	と	も	二	日	三	日	や	冬	こ	も	り	北
四箴五戒は教の常存と													北

（大東京文具チエーン時器）

誤	笑	の	家	に	は	近	く	氏	二	章	の	
高	喧	に	過	す	と	い	ん	が				
蛇	の	目	の	何	か	さ	と	り	て	早	か	こ
物	い	へ	は	唇	さ	む	し	穂	の	風		
東花坊												
芭蕉を擬												
三四才												

文者貫道之器也。不深於斯道。有至學者。不也。是也。
 蓮ニ先師の主命は天文星にあり。聰明學
 識さうにいふへか。以蓮門の二世にして阿難
 の経花をのへ。曾参の一以を傳ふか。且し我蕉翁
 の芝りの四方に徧ふも。以先師の道を弘め。至
 しゆへ。有り。ふか。ハ無。以爲也。先師不可毀謗に
 いふ。夢喰ふむし。好く。に。た。ふ。袂。て。は。道。に。ま。よ
 ぶ。人。も。あ。る。一。し。我。も。我。す。す。に。は。後。へ。に。題。し。て
 世の存亡は西の海へさら星

越之後刈出雲崎内仙風
書于別莊東雲閣



白字



ノ
イ
ブル

10
20
ノ
イ
ブル

